

メモ：宗教と国家という共同幻想 「蝶の雑記帳 94」

ときどき畏友と会って話をするようになった。高校までの同級生である。さまざまな話題がわたしを刺激し、大いに啓発されている。先日は、娘の住んでいる市で手術を受けることになったわたしを見舞いがてら話に来てくれ、鹿島茂という人が冊子『ちくま』に連載している小文「吉本隆明 2019」の12月号分をコピーしたのをもらった。この連載は吉本隆明の『共同幻想論』を読み解くことをめざしているようだ。何事もおくでのわたしは吉本隆明が一世を風靡していたころに読んだことはなく、その著作を二、三読んだのは四十歳を過ぎてからである。「吉本隆明 2019/12」の論点は日本列島における神話の発生や国家の形成にかかわり、わたしが最近考えている古代史の問題に関係するので、畏友がそれを知らせてくれたのである。

実際それを読んで考えるところがあったので、文章にしてみた。時間におかれて、草案にすぎないその文章をメールにして送った。わたしは、目下の古代史についての思索から、日本列島における神話の発生や国家の形成を歴史学的に探究すれば、「日本国という共同幻想」の起源と実体が明らかになり、その幻想を解体できる、と考えたのである。今読み返せば、吉本著『共同幻想論』の重要さに対する配慮が足りなくて一方的な議論になっているが、この問題を実証的なアプローチによって解明することが必要だという考えは有効だと思う。

* 2020年2月13日のメール

きのうはお見舞いをいただいて恐縮しています。ありがとうございました。

見せてもらった「吉本隆明 2019/12」を読んで考えたことがあります。ほんとうは出かけて行って話したいのですが、医者に手術前にかぜなど引かぬようにと忠告を受け外出を控えているので、今回はメールにします。

吉本隆明という人は敗戦によって日本という国を根本から考え直すことを迫られて、『共同幻想論』を書いたのでしょう。小生が不満に思うのは、観念を形而上学的に議論する点です。何事も考察対象の事象をまず正確に把握する努力をすることが大事だと思います。

吉本さんの「共同幻想」の「起源論」では、『魏志倭人伝』の卑弥呼と弟、『古事記』神話のアマテラスとスサノオの関係を出発点に据えて議論しているようです。

ところで、小生の『倭国はここにあった』は、この問題を考えていると言うことができます。その議論は、弥生時代の最重要な三遺跡が東西線上に並んでいるという事実を基礎に置きます。その事物の関係が、水稻栽培をする生活で日の出が教える季節ごとの農事に関連してイメージがふくらんで、地理的関係の指標となる山々の頂上にイザナギ・イザナ

ミなどの神々を幻想し、さらに宗教が形成されたという経緯を推定することを可能にします。これを、日本列島の古代宗教の実証的な起源論に当たると言ったら言い過ぎでしょうが。時代の進展とともにその「太陽の道」の観念をふくらませて、権力を増した王が太宰府の真東と真北に太陽神を祀る神殿を建設した、というのが第二の主張です。この時代に大根地山の頂上に建てられた神社にはイザナギ・イザナミ…、太陽神…ニニギ・ヒコホホデミ…が祀られていて、天神七代・地神五代の系譜をつくって神社宗教が体系化されたことが判ります。それを先行モデルとしてアマテラスを祀る伊勢神宮が建設されたのです。共同幻想としての日本の宗教がより具体的にその基礎にある事物や生活から理解可能になります。神社信仰という共同幻想が解体できます。ちなみに、天照大神は女神とされますが、巫女としての卑弥呼や日神の娘の三女神が太陽神にいつく巫女であるという説話によって変性されたのだと考えられます。日神からヒコホホデミまでの地上の王位はもともと男系で継承されたという説話だったと考えられます。天皇の寝所に置かれたアマテラスや伊勢神宮の天照大神の扱い方は男神にするようだという話を読んだことがあります。そうすると、吉本さんの「卑弥呼と弟」や「アマテラスとスサノオ」の関係を家族関係から社会的関係への転換と読みこむのは考えすぎということになります。

大和の初代王神武は、『日本書紀』ではヒコホホデミという名をもっていたように書かれます。これは、この王統が

神々につながっていることを主張しようとしているのだと考えられます。しかし、その王権神授説は福岡都市圏で始まった倭国で「太陽の道」信仰の形成と並行して形成された、と考えるべきです。政治権力の幻想も歴史の中においてとらえることができるのです。宗教的な神話が政治的な王権と不可分に結びついているのが、世界の古代国家の一般的なあり方でした。ですから、日本国という国家についても、世界に共通する現象として理解するのが基本だと思います。

吉本さんは日本国という共同幻想の解体を目指したのだと思われませんが、古代については、小生の観点からすれば、形而上学からではなく歴史学の方法で『記・紀』の呪縛を断ち切ることでなしとげられるのです。それが、今準備中の論考です。中国史書は日本列島に倭国が形成されて、のちにできた日本国は倭国とは異なることを教えます。その倭国から日本国への移行は、中国で行なわれてきた禪譲の方式で行なわれたというのが小生の考えです。それを、こんどは『日本書紀』と『続日本紀』に語らせることができる、と思います。日本国がそれ以前にあった倭国から王権を奪取して成立したことを具体的に明らかにできれば、日本人が抱いている日本国は「万世一系の神国」だという共同幻想を解体することができます。と思います。

よくまとまっていませんが、小生の考えているのは上のようなことです。

もとの文章は考察が足りず練り直す必要があるのだけれども、現在のわたしの置かれた条件ではそれができないので、メールに書いたままの文をここに収録した。

補遺

日本国という共同幻想に関して、古代だけでなく近代以降についても、それを世界史のなかに位置づけてとらえることが重要だと思う。上で古代の日本列島で形成された共同幻想が古代世界一般のそれと共通する起源をもつと考えたが、近代日本の「天皇制国家」が広めた共同幻想も、世界の近代国民国家が形成した国家のイメージ戦略と無縁ではない。たとえば、植民地から独立して成立した東南アジア諸国を研究した B. アンダーソンの著した『想像の共同体』がそのことを教えてくれる。文化的に大きな差異を含む多くの島々から構成されるインドネシアという国家は、近代ナショナリズムに適合的なイメージを構成することによって共同体をつくっている。国家という共同体は、それを構成する社会とそこに暮らす人々がいだく幻想によってつくられるのである。ここで、各共同体の幻想は、それぞれが背負う歴史から逃れることはできないが、他方で、近代以降はいっそう、共時的にそのなかにある世界史の潮流の影響を強く受けるということも忘れてはならない。日本国という幻想を孤立した固定的なものとして見れば、その幻想を解体する思考や具体的な方策を生

み出すことがむずかしくなる。

現在でも、国家を支配する勢力が支配を容易にするために幻想を操作するという側面に注意することは重要である。現下の日本国・中国・アメリカ合衆国・英国あるいはトルコの政治状況を、世界共通の経済問題に直面して、政治をやりくりする幻想をばらまくのにやっきだ、と見ることができる。

2020年4月22日

海蝶 谷川修